

南京の松村伍長

— 閉ざされた記憶を尋ねて — (30分)



◆ 監督：松岡環・岡崎まゆみ

◆ 撮影：松岡環 林伯耀・岡崎まゆみ・井之川泉

◆ 聞き取り調査：松岡環

◆ 構成編集：松岡環・岡崎まゆみ

★★★★★上映会のインフォメーション★★★★★

- ・ 上映費用— 1回の上映につき 1.5 万円です。2 回以上は基本の割りましです。
※同映画の監督であり証言集『南京戦』2 冊、『戦場の街南京』の著者の松岡環のお話がついています。(交通宿泊などの実費が必要です)
- ・ 連絡方法— Tel090-9986-0792 fax06-6628-8172、mtoktmk@bird.ocn.ne.jp

★ドキュメンタリー『南京の松村伍長』松村芳治との出会い

『南京の松村伍長』監督：松岡環

松村芳治（まつむらよしはる）が語る南京大虐殺は、足かけ8年間の長期間にわたる取材にもかかわらず話す内容は一貫していた。南京陥落の日に揚子江岸に攻め込んだ全ての日本兵が、流れゆく無辜の人々を機銃掃射した様子。南京陥落の翌日大規模な掃討の中、松村は、難民収容所から引き出した10人の中国人を軽機関銃で殺した。彼の青春時代、軍隊内では「上からの命令は疑問に思うことすらなかった」と松村はしみじみ語る。松村との出会いから彼がなくなる直前まで、私たちは松村の発する言葉と表情を記録してきた。晩年の松村の映像から、彼の心のゆれや痛みが垣間見られる作品となった。

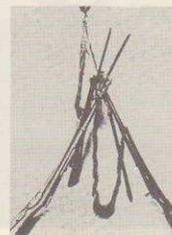
作品概要: 昭和12年8月松村芳治は、第16師団歩兵第33聯隊に召集を受けた。盧溝橋事変が勃発し、日本が中国への全面戦争を始めた年であった。始めは河北での戦線で女も子供も殺してしまう松村たちであった。支那事変と称されるこの戦争は、中国軍民の激しい抵抗にあい、松村たちは河北から南下して上海近郊の揚子江に敵前上陸する。1ヶ月後、南京になだれ込んだ日本軍は南京大虐殺を引き起こした。南京陥落の12月13日松村も躊躇なく揚子江上を逃れていく民衆を機関銃や歩兵銃で撃ちまくる。その様子を松村は故郷に手紙を書き送る。そして翌日の掃討10人の中国人たちを揚子江河岸に並べて機関銃で撃ち殺す。松村の証言は、6年にわたり記録していったが、亡くなる前年にはこれまで語らなかった「南京では女も子供も殺した」と逡巡しながらも語っている。松村にとって「南京」は重い課題であった

●南京戦参加兵士を探すための手がかり

松村芳治との出会いは、もう十年余前になる。私が南京戦に参加した元兵士を何とかして探し出したいと考えていた頃だった。新聞記者をしている友人や中国帰還者連絡会のメンバー、元兵士だった方々に南京戦に参加した兵士は、居られるのだろうかと言葉を合わせたら聞きまわっていた。そんな私に取材を通じて知り合った新聞記者の筑瀬重喜さんが、一九九七年の秋のある日、私に電話をくれた。「松岡さん、三重県立図書館に寄って探したら『鈴鹿「戦争を聞く会」』と言う戦後五十周年の市民団体の報告集に南京に行った人の戦争体験が載っていました。南京の虐殺には触れてはいないけど。それからもう一冊伊賀町郷友会の本がありましたよ。戦歴と

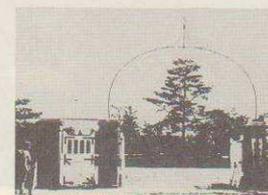


これは阿漕駅から出征兵士を見送る風景。このように伊賀町の人々も植穂・新堂・佐那具駅から入営、出征の時に見送られて行った。
(居附萬亀勇氏提供)



歩兵第33連隊軍旗

軍旗は連隊創設(明治29年)のもの。幾多の戦場で弾丸雨の中をくぐりぬけ、房のみとなる。組んである銃は3.8式歩兵銃。



歩兵第33連隊営門

多くの人達が入営の時にくぐり、そして戦場へ出征の時に出て行った思い出の営門。

短い感想文が載っています。その人が生きて居るかは解りませんが、それに、『魁』と言う三三聯隊の南京戦記があります。」との事だった。私は「とにかくその部分のコピーを送ってください。大きな本は奥付でいいですから、ありがとう。」と筑瀬さんにお礼の言葉を早口で言いながら電話を切った。三重県の図書館にしかない郷土史や市民団体の取り組みの冊子に掲載されている戦争体験者と言う事は、三重県出身の兵士だと。その元兵士達の殆どは、恐らく南京に駐屯した第十六師団歩兵第三三聯隊に関連しているであろうと考えられた。大阪の大きな図書館をいくつか回り、探しても南京戦に参加した兵士の体験記等を記した書物は見付からなかったので、友人がもたらしたこれらの南京の手がかりに私は小躍りした。電話を終えてから、自分の声がかかなり上ずっていたのに気づいて一人苦笑した。

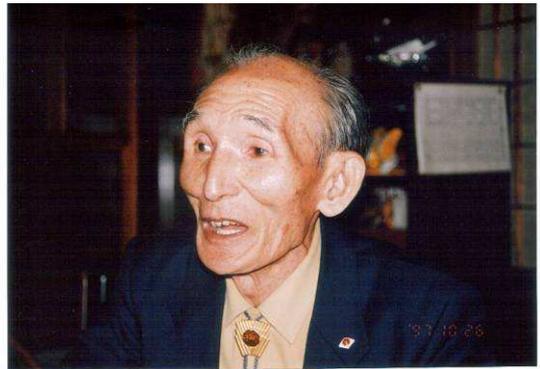
その後も、南京大虐殺にかかわった元兵士を探すために、私は、関係部隊が存在する奈良や福知山の地方図書館を回った。また、市民運動の友人たちと協力して南京戦に参加した兵士への呼びかけの手紙を出した。何といても圧巻は「南京大虐殺情報ホットライン」の設置だった。

この取り組みは、南京大虐殺六〇周年に当る一九九七年に、私が共同代表をしている南京大虐殺六〇ヵ年全国連絡会が主催した取り組みだ。全国六箇所の都市で電話を設置し、南京大虐殺の情報を電話で集め、三日間の期間中南京大虐殺を直接体験した元兵士からの電話が十八件（本人に聞き取り可能が十三件）だった。一人の兵士を訪問すれば必ず戦友会や戦友を紹介して頂き、どんどん取材先を増やしていく方法を取った。

●南京戦に参加した兵士・松村芳治を訪ねる

先に述べた『鈴鹿の平和の集い』に戦争体験を書いていたのが松村芳治だった。

私は、友人の筑瀬さんから、南京戦参加の可能性のある元兵士松村の戦争体験のコピーが送られてくると、先ず、その鈴鹿「戦争を聞く会」の報告集（一九九五年九月作成）を読んだ。松村の文章は、「南京への攻略戦の最中、敵と激戦中、目の前にいる戦友が死んでしまう体験をした。戦友はオカアサンと息絶えた。日本はアジアの



人々を苦しめ日本も原爆の被害を受けた。戦争は両国共に多数の尊い人の命とすべての財産を失う。戦争体験者が平和の大切さを伝えて行こう」と結ばれていた。この人はとにかく南京に行っているので、戦友の死と共にアジアの民衆の苦しみも言葉にしている。もしかしたら、南京での体験を話してくれるかもしれないと言う期待を私は抱いた。

鈴鹿「戦争を聞く会」をまとめられた男性に電話した。私達が毎年南京大虐殺の証言集会を各地で開催していること。市民運動の主旨や、南京大虐殺に関わった部隊の元兵士を探していることを説明して、松村家を訪問できるように紹介をお願いした。あいにくその方は時間が取れないとのことだったので、訪問に際し御名前を使わしていただく了承を得た。数日後カメラや録音機を携え早速鈴鹿市

に出掛けた。

教えていただいた住所を頼りに、地図を見ながら一面茶畑の中の一本道を車で走り続けた。目指す集落の中に入り畑仕事をしている老人に聞くと「アアすぐそこです」と指差して教えてくれる。松村の家は、近郊農家の典型的な造りで、中庭の周りに立派な日本建築の母屋と年月を経た屋根の低い二階家、向い側には農機具や収穫物を入れる大きな倉庫がゆったりと並んでいる。おまけに三つ目の倉庫から黒い犬がのっそりと出てきて私を見て、ウワ〜ンウフオツとあまりやる気なさそうに一声ほえた。私は体をかがめて手を前にゆっくり出すと黒い番犬は、耳を倒ししっぽをふりはじめた。

敷地内にある古い二階屋には縁側に大きな踏み石が置いてあって、石の上には男物の下駄と女性用の地味なサンダルがきちんと脱ぎそろえてある。縁側は東側に面して日が良く当るようになっている。縁側から「松村さん」と中に声をかけた。すりガラスの障子の奥で人の気配がする。二度ほど大きな声で名前を呼ぶと、中の部屋から縁側に出てきてガラス戸を開ける人の姿が見える。「どなたですかな。」と顔を出したのは、やせ気味の背の高い老人だった。優しくな目をしておられた。

私は、「鈴鹿戦争を聞く会の本を見ました。松村さんは、戦争体験を子供たちにしておられるそうですね。私達も戦争の事実を知りたくて聞き取り調査をしています。」と説明して、ぜひ日中戦争の体験を聞かせて欲しいとお願いした。

奥さんも、顔を覗かせて、「どうぞ、どうぞ、上ってくださいな。」と気軽に招き入れてくださった。

息子夫婦と同じ敷地の中に年寄り夫婦が別棟で暮らしている。食事はお嫁さんが運んでくれるので楽ですわ。何もしんどい事ないんですよと奥さんが言う。松村は、最近まで、老人会や地域の役を引き受けてはいたが、今は第一線を退いてのんびりしていると言われる。松村が差し出した名刺には沢山の地域での役職の肩書きが並んでいた。

●初めて松村が語る南京戦



松村は、一九三四年（昭和九年）軍隊に入隊した。現役時代は、第十六師団歩兵第三三聯隊本部の三重県久居でしばらく新兵教育を受けていたが、すぐ、満州に渡る事になった。チチハル、ハイラルの陣地に対ソ国境警備の歩哨に立ったそうだ。

満州に行った兵隊からはよく聞く話だが、「冬は風呂に入って宿舎に帰るまでに手ぬぐいが棒のようにカチカチに凍ってしまっていたよ。」と松村も満州での兵隊の暮らし（右写真：1935年旧満州時代）を話してくれた。旧満州での生活は、正に青春時代であるから、「食事は交代で当番が運んだ。配膳が終るとみんなで一斉に食べてなあ。

とにかく黙って早く食べて、片付ける。なんでも競争だった。」と懐かしそうに話す。軍隊特有の私的制裁、リンチも「古年兵がちよつとした気に入らん事があれば、ビンタを張る。班長が下士官室に戻ったら、さあ制裁が始まる。そんなのはしょっちゅうありましたなあ。」と思い出話として、どんどん、質問に答えてくれる。日中戦争が始まり召集されて後の話を聞いていく。昭和十二年暑い盛りの



（破壊した中山門付近の日本兵）

八月の末頃召集を受け九月に大阪港を出発した。松村は、「私達が日中戦争期間、兵士の眼で見た戦場で起きた歴史の事実をきちんと記録したい」と言う主旨をよく理解した様だ。



揚子江の敵前上陸から南京への追撃戦、南京城の掃蕩、集団虐殺、機関銃での射殺などを話してくれた。勿論聞き取りを初めてした時は、南京大虐殺からすでに六〇年を経過していた。松村は、私の細かい部分の質問にも「南京城内に入ると、城壁のすぐ側の壁やったかなあ。「忠孝仁愛忠義和平」と言う文字が大書してありました。その時はなあ、難民区に入って行って男と言う男をオイッオイッ指差して引っ張り出すんです。面や目つきの悪いのは兵隊と言う事ですな。まあ運が悪いんでしょう。」とかなり具体的に思い出して話してくれる。松村の記憶は、素晴らしく正確だったと、後で同じ三三聯隊十二中隊の戦友（十名）からの聞き取りをして、わかった。（右写真中央：分隊長の松村）

松村の十二中隊戦友会久我隊は、南京戦当時の中隊長だった久我中尉の名前を取って、戦後の戦友会を開いたそうだ。「久我会」と書いた紺の旗を箱から取り出して松村は「湯ノ山温泉や椿神社で年一回、戦友会を開いてみんなと会っていましたんや。」と懐かしそうに旗を広げて見ていた。私達が調査を始めた一九九七年にはもう、戦友会の世話をする者、つまり松村や参加メンバーが、寄るとしなみで集まりにくくなったので、戦友会の活動をやむなく停止したそうだ。残っていた名簿を袋から出して、戦友会に来て

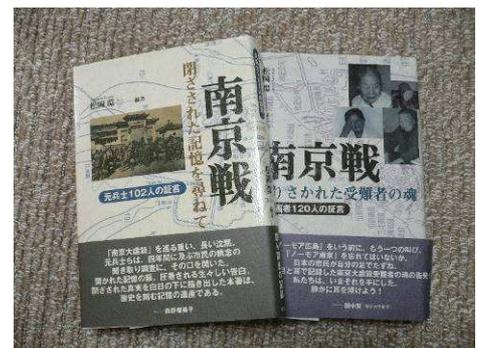


いた参加者を教えてくれた。私は、全員の名前をノートに写し、大阪や三重県下の各町を尋ねた。勿論もう亡くなっておられる方も多数居られた。元兵士達が元気で生存して聞き取りができた、亡くなられた事がわかると、必ず松村にその消息を伝えた。

松村と同じ第十二中隊の聞き取りが出来た方は、沢村、長谷川、豊田、奥山小隊長、余谷、出口、大門、上森、藤井、平山、竹本、の諸氏。また、訪問して聞き取っていくうちに南京にたどり着くまでに負傷された方も何名か居られた。松村の紹介で、本当に沢山の証言を記録する事ができた。（右上写真：元兵士を養老院で聞き取りする）

●証言集『南京戦一閉ざされた記憶を尋ねて』の出版を喜んでくれた松村芳治

松村を始めて訪問したのは、上述のように南京戦に参加した元兵士の調査活動を開始したばかりの一九九七年の秋だった。松村は未だ八十四才、足腰もしっかりしてバイクに乗っていた。腰もまっすぐで一緒に歩いていても私達と同じ速さで車の乗り降りも問題は無かった。勿論記憶もしっかりして、毎回尋ねると「思い出しましたな」と日中戦争当時を思い出し新しい出来事の話をしてくれた。本もどんどん読んでおられた。自分の父親世代なのに頭の回転がすばらしい人だなと感心した。二〇〇二年夏、私が証言集『南京戦一閉ざされた記憶を尋



ねて』(元日本兵士の加害証言)を刊行したので、お礼と報告のために、松村宅を訪れた。松村は、出来たばかりの分厚い本の表紙をなでながら「立派な本が出来ましたな。わしも、あんた達が何時も来てくれるので、自分も何か書かないとアカンと思いますのや。」と笑顔で答えてくれた。松村は、自分の話が記載されている頁を開いて、「よう書いてくれましたな。自分の名前は仮名やけれど、実名で出して欲しかったな。」とぼそりつつぶやいた。私達は、南京での市民や元中国兵に対する暴行や集団虐殺、強姦、略奪などの行為を話してくれた加害兵士を歴史修正主義者達から守る為に細部に渡る部隊名や実名は表記しなかった。証言をした元兵士は、聞き取りを終えた後、全員が、資料の活用や文章掲載の同意書に署名捺印し、殆どの南京戦参加元兵士は「実名を使ってよい」「南京大虐殺は、本当にあったことなんだから」と答えてくれた。しかし私達は、聞き取りを記録したからには、歴史修正主義者であり南京大虐殺を消し去ろうとする勢力の誹謗中傷から老人達を守らなくてはならない責任があると考えた。静かに暮らしている老人達に不愉快な圧力が及ぶのを心配した。私達は、調査に関わったメンバーで話し合い、あえて、証言をしてくれた老人達全員の名前を仮名にして出版したのだった。

●衰えてゆく松村とのお別れのときが近づく



私達の本を出版する前頃から、鈴鹿の近くに調査に来た折、松村宅(右写真)を訪ねると、朝十時ごろでも起きてはいなくて、まだ休んでいると言う事があった。私は、「体の調子が悪いのならまた来ます。」と言うと、奥さんが「そうではなくて、この頃一日床に入って起きてこない日がありますねんで。こんなしとったら、歩けなくなりますやろ。」と奥さんが心配そうな顔で私に同意を求めるように言う。「あんたさんらが、来てくれたので喜んで起きますわ。」と取り次いで下

さった。暫く縁側で待って居ると、寝室から茶の間へと松村が、起き出して来た。「よう来てくれなされた。」と私達の来訪を喜んでくれ、最近の体の調子を聞いたり、私たちが訪問した三十三聯隊の元兵士の訪問した時の状況を松村に話した。だれそれはどうしているのかなど、松村は戦友や軍隊時代の同年兵の近況を気にしていた。もうこの頃からゆっくり言葉を選ぶように話し、体も以前のように動かなくなっているのか動作もかなり緩慢になっていた。話すとき喉が引っかかるのかティッシュでタンをしきりに拭っていた。何よりも体重が減ってきたようで、頬の肉がおち、顎がとがって見えた。

その後も何度か自宅に伺った。起きて来られる事もあったが、ベッドに寝たままの松村に話してもらった。眼は落ち窪み生気が見られなくなっていたが、私達に日中戦争中の中で起きた南京掃蕩での機関銃掃射の様子を話してくれた。一言一言思い出しながら。ゆっくりと話す言葉はこれまで話した事柄と違いは無かった。「平和の為に自分が戦場でやった悲惨な事や見た事を話さなくてはなりません。」と常々言っていた。病床であっても若い世代に伝えようとしているのだと、私は松村の思いを強く感じ取った。録音機のマイクを松村に近づけながら、(もうこれでこの人からの聞き取りはお終いかもしれない)と腕を伸ばしてマイクの方向を確認した。

二〇〇四年年春、いつものように、中庭で車からおりて、松村に私が来た事を告げよう縁側に近づい

た。松村の下駄がいつものように踏石の上に見当たらなかった。(あれっどうしたのかな) といやな予感がした。松村さんと呼びかけると奥さんが顔を出した。「お爺さんね。体の調子が悪くなって入院したの。大分ボケてますで。」と奥さんが言われる。その病院は、以前「行きたいけれど車がないので」と聞いて私達が老夫婦を車に乗せて送って行ったことがあった。十五分ほど表通りをまっすぐ行った所だ。すぐに御見舞いのお菓子を持って、病院に向った。ナースステーションで部屋番号を聞き病室に入ると、車椅子に座って外を見ている松村の姿が眼に入った。「松村さーん、今日は」と挨拶をするとこちらをまっすぐ見て少年のような笑顔が返ってきた。しかし、暫く松村さん体調や友達の話をしていると、体力の衰えと共に確実に記憶も衰えているのが感じられた。「松村さん、良くなって又、おすしを食べに行きましょうね。」と言うと「そうですね。うまい店がいいですなあ。」と返事が返ってきた。暖かくなったらきっと良くなって体力も気力も取り戻して欲しいものと願って、松村にお別れをした。もう九十一歳。でも南京戦に参加した元兵士の中でも、侵略戦争であり南京大虐殺が確かにあった事だと認めた数少ない人であるだけに、もう少し、元気でいて欲しいと願わずにいられなかった。

病院に松村を見舞ってから二ヶ月後、松村は、苦しむことなく枯れるように永眠された。

二〇〇四年五月 九十一歳と三ヶ月だった。合掌

監督：松岡 環（まつおか・たまき）プロフィール

1947年生まれ、関西大学文学部史学科卒業、会社員、専業主婦、25年間小学校教員を務めながら歴史認識活動と日中の近現代史の調査を現在も続ける。

銘心会南京友好訪中団の代表として20年間以上日本軍の侵略戦争跡地を調査してスタディーツアーを主宰する。南京攻略戦の日本兵250名、南京大虐殺被害者300名を調査し記録する。南京大虐殺60カ年全国連絡会共同代表。大阪経済法科大学アジア研究所研究員

ドキュメンタリー映画『南京引き裂かれた記憶』（88分）制作総監修。2011年上海国際映画祭招待作品
ドキュメンタリー短編映画『南京の松村伍長』（30分）監督

著書は以下

『戦場の街南京—松村伍長の手紙と程瑞芳日記』編著、社会評論社2009年

『南京戦・閉ざされた記憶を尋ねて』編著、社会評論社、2003年日本ジャーナリスト会議賞受賞『南京戦・切り裂かれた受難者の魂』編著、社会評論社、2005年南京大屠殺史調査研究貢献賞受賞

『写真図録—南京大虐殺』主編、南京大虐殺60カ年大阪実行委員会

共著『「慰安婦」・戦時性暴力の実態Ⅱ』vol.4、緑風出版）論文に「南京大虐殺以降の日本軍・企業による労働力、資源収奪と虐殺」「日記と証言から見えた太平門での集団虐殺」などがある。

スタッフの紹介

映画制作監督	松岡環、岡崎まゆみ
カメラ撮影	松岡環、林伯耀、岡崎まゆみ、井之川泉
音声	岡崎まゆみ
取材	松岡環
歴史検証	松岡環
資料提供	日中平和研究会
協力	松村芳治 日中平和研究会 「銘心会南京」友好訪中団

※ 皆さんの街でも『南京の松村伍長』の上映をぜひ進めてください。

TEL090-9986-0792 fax06-6628-8172、mtoktmk@bird.ocn.ne.jp (松岡)